
ルンペルシュティルツヘン

あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルンペルシュテイルツヒエン

【Nコード】

N9521T

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

童話『ルンペルシュテイルツヒエン』のちょっと違ったお話です。
このお話知ってる人いるかなあ？

昔々ある所に、手芸屋の娘が居りました。年老いた父と二人で暮らしていた娘はとても美しく、町中の評判でした。金の髪は黄金を塗り込んだように輝いていましたし、青い瞳はまるでまっさらな空を閉じ込めたようでした。

娘は糸を紡ぐのが大層上手で、町中の服屋が娘の作る糸を使っていました。

「彼女の作る絹糸はね、まるで黄金のように綺麗で滑らかなんだ」
ある服屋のそんな言葉から、娘は金を紡ぐ事が出来るのだとまことしやかに噂されるようになるほど、大層美しい糸を紡ぐのでした。

+

「——どういう事なの！」

私は怒りに肩を震わせ、父を思い切り怒鳴りつけた。手には、城から送られてきた一通の手紙。何があったのかしらと開いてみれば、そこには信じられない事が書いてあった。

「いや……、でも、お前に為になるかと………思つて……」

しどろもどろになりながら語る父の姿に溜め息を吐く。一体、これのどこが私の為になると言うのか。こんな出鱈目、どうかしていいとしか言いようがない。

「意味が分からないわ。私の為になんかなる訳ないでしょう、こんな事！ 何よ、この手紙。『金を紡ぐ娘』って何なのよ、出来る訳ないじゃない！」

美しい封筒に、王家の紋章の入った蠟封。蠟をはがして中を覗けば、甘い香りのする綺麗な便箋。大層な挨拶文から始まったその手

紙には、倉庫いっぱい蕁を金に変える事が出来れば褒章を与えようと、けれど出来なければその命はないものと思えと、そう書かれていた。

そんなこと、出来る訳がない。

どうしてこんなものがと父に問うてみれば、城の兵士にうつかり「うちの娘は金が紡げる」などという世迷言を口走ってしまったらしい。その結果が、これだ。

「仕方ないから取り敢えず行くけど、私は確実に死ぬ事になるわね。ああもう、全部父さまの所為よ！ 死に際に父さまの事呪ってやるから！」

怒鳴りつけ、私は自分の部屋に駆け込み、鍵を掛けた。そして、部屋を片付け始める。

まさかこの年で死ぬための準備をする事になるなんて！

2

娘は細い指に母さまの形見の指輪を填め、迎えに来た兵士たちについて行きました。連れて行かれたのは小さな倉庫。そして、その倉庫の中には山と積まれた大量の蕁と、糸紡ぎ。明日の朝までにこれを金に変えて見せると兵士は言いました。出来なければ偽証罪で打ち首だ、と。

きい、と鈍い音を立てて重い扉は閉じられ、かしやんと鍵がかけられました。娘は失望しました。蕁を金に変える事など、娘にはできないのですから。

十

「——この蕁の山を金にしるですって？ なんて愚かなの、あの人の言葉をそのまま鵜呑みにするだなんて！」

大体、偽証の罪を被らなければいけないのは私ではなく父さまで

あるはずだわ。いいえ、そうあるべきよ。ああもう、あの馬鹿どうしてくれよう！ あんなのが実の父親だなんて、吐き気がするわ。どういつもこいつも馬鹿ばかり！ ああ、どこかに逃げられるような所はないかしら、どこか脆くなっている壁はないものかしら。あったら蹴破つてでも逃げるのに。

苛々と悪態をつきながら、堅く閉じられた扉をけりつけた。けれど金属の扉はぐあん、とひとつ呻いただけで、すぐに泣きやむ。

「とにかく、生きて帰るには逃げ道が必要だわ」

「——おれが助けてやろうか？」

ちっ、と舌打ちをしたその瞬間。すぐ真下からひび割れた声が私に伝えた。驚いてみて見れば、そこには小さな小さなトンガリ耳の男がひとり。

「……貴方は？」

エルフ？ ゴブリン？ それともホブゴブリン？

小さな男はにいと口角を上げて笑ってみせると、どれも違うが今のあんたにやホブと言うのが近いかね、とそう言った。

ホブゴブリンと言うのは、一杯のミルクを与えるだけで家事などを手伝ってくれる妖精のことだ。裏のありそうな表情と言葉に訝しむが、ここは密室。目の前には大きな人災。私はひとつ溜め息を吐いて自称ホブゴブリンに視線を合わせた。

「心優しい小人さん、ホブゴブリンさん。ひとつお願いがあるのだけれど、良いかしら？」

「この藁を金に変えりゃあいいんだろ？ じゃあ、代わりに何かおくれよ。ここにミルクはなさそうだから、他のものでも構わんよ」

ひび割れた声が、楽しそうにそう言った。ああ、やっぱり。見返りなしでやってくれる訳ではないのね。思って、しばし思案する。この身一つで倉庫の中に入れられたのだ。だから、特別に渡せるようなものはひとつだって持っていない。

「……そうね、この髪じゃ、対価にならないかしら？」

示したのは、自らの長い髪。母親譲りの美しい金色の髪。手放し

ても惜しくないもの、手放したとしても今後の生活に支障のないもので渡せるのはこれくらいだ。

「良いのかい？ 髪は女の命と聞くよ？」

「髪なんか放つて置けば勝手に伸びるわ」

言つて、倉庫の隅に置かれていた鎌で自分の髪を切り落とす。齒の毀れた古い鎌は髪に引つ掛かつて上手く切れず、ぶつぶつと何本か根元から抜ける音がした。

「おやおや、随分と思い切りのいい」

「髪くらいでがたがた言うほど女々しくないわ。さあ、約束よ。この藁の山、明日の朝までに金の山にして頂戴」

3

次の日の朝、倉庫を見に来た兵士たちは大層驚きました。山と積まれた藁が、見事な金色に輝いているのです。ひとつひとつを手に取り、藁にはないその重さにこの娘は本物だ、と騒ぎました。

報告を受けた王様も大層驚き、今度はまた、更に大きな倉庫で更に沢山の藁の山でやってみるよう言い渡しました。

十

「なんて厚かましいのかしら！ あれだけの藁を金にしたのにまだ足りないと言うの？ しかも全部持つていくし！ 何のために税金払つてると思つてるの、あれで満足しておきなさいよ！」

住民税に所得税、年金だつて将来貰えるかどうかかわらないのに払つてる。消費税だつて上がっていく。不平不満を言つてはいるがどれもきちんと払っているのに！

もう一生涯税金払わないでも良いくらい持つて行つたじゃないの、それどころかお釣りがくるわ。迷惑料を貰つてった良いくらいじゃないの。守銭奴国王め！

この気違いイベント終わったら速攻で引越してやるんだから、見てなさい。これ以上この国にお金なんか払ってやらないんだから！ 何が不況だ、値上げしてばかりじゃ経済回らなくなるのよまずやるべきはデフレ対策でしょう！？そのくらい気付きなさいよ！怒鳴り散らし、煉瓦の壁を一度思い切り蹴りつけた。けれど壁はびくともせずにふんぞり返る。足が痛い。ひびのひとつ位入ったっていいじゃない、気の利かない壁！ ああ、全く腹が立つ。古い鶴嘴か金槌か、何かないかしらと辺りを見渡すが、この倉庫には何ひとつ置いてない。あれば壁を叩き壊してでも脱走するのに。

「小人！ 小人はいないの！？」

「——おや、気付かれておいでかい？」

ああ、やっぱり。

白雪姫然り、シンデレラ然り。どんな物語においても、割と都合よく現れてくれるとても優しい小人妖精魔法使い。私の前にだって都合よく現れてくれなきゃ不公平なものね、居ると思った。

「何が欲しい？」

「おれが決めてもいいのかい？」

今回だって、私は身一つ。あげられるほどの髪の毛もない。渡せるものなんか自分では思いつかないのだ。いいわと頷けば、小人はそうさねえ、と呟いた。そして私の手元をちらと見て、そして、それがいいと指差した。

「じゃあ、その指輪。それをおくれ」

「これは駄目。母さまの唯一の形見の品だもの、渡す訳に行かないわ」

「そんなら、今度こそお前さんは殺されんだね。その指輪……真鍮製だろう？ 大して価値のない小さな指輪ひとつで命が助かるつてのに。あんたのおつかさんだって命と引き換えならさっさと渡せと言っただろうよ」

「……なら、貸しとくわ。取り敢えず、今だけね。後々父さまか何か代わりのものを渡すから、そのときにでも返して頂戴」

面白い事を言う。小人はそう呟くと、私の指から指輪を抜き取り、
にいと口角を歪めて笑った。憎たらしい顔。
トンガリ耳が、ひくりと動く。

「それじゃあ、とくと見るんだね。小人の奇跡を間近で見られる人
間なんて、そうそういやしないのだから！」

4

次の日の朝、倉庫を見に来た兵士たちは二度目の奇跡にまた大層驚
きました。山と積まれた藁が、それは見事に輝いているのです。ひ
とつひとつを手に取り、藁にはないその重さにやはりこの娘は本物
なのだと騒ぎました。

報告を受けた王様もまた大層驚き、今度はまた、更に大きな倉庫で
更に沢山の藁の山でやってみるよう言いしました。三度目の奇跡を
見せてみると、王様は娘に言い渡したのです。

娘は大層嘆きました。娘にはもう、小人に渡せるものが何ひとつ
なかったのです。

十

「——そんじゃあ、お嬢さんの一番最初の子をおれにおくれよ」
「いいわよ」

子ども、産む気ないから。

そう言つて、私は小人をちらと見た。一瞬残念そうな顔をしたが、
ふうとひとつ溜め息を吐いて糸紡ぎの前に腰を下ろし、藁を紡ぐ。
紡いで紡いで、きらきら光る金を紡いだ。

「あんたは絶対に子を授かるよ。おれには分かる。あんたに良く似
た、めんこい赤子だ」

言つて、にいと口角を歪める。なんて嫌らしい笑い方なのかしら
と、私は眉間に皺を寄せた。

「まあ、良いわ。後の事なんて分からないもの」

かたかたと、物凄い勢いで金に変わっていく藁の山。それをぼんやりと眺めながら呟いた。

後の事など分からない。ちゃんと家に帰る事が出来るのか、それとも生きた国庫として延々倉庫巡りをさせられるのか。後者ならさつさと舌嚙んで死んでやればいい。どうせ自分では何も出来ないのだ。ぼろが出る前に自ら命を絶つまでである。前者なら、取り敢えず父さまの横っ面引っ叩いてやらなければならない。

いや、どちらにせよ一発殴るか蹴るかさせて貰えなければこの煮えくり返っている腸がおさまらない。倉庫巡りなら国王を、帰宅できるなら父さまを。何が何でも死ぬ前にぶん殴ってやらなければ。でなければ、成仏なんか出来やしない。

「お嬢さんはきつと、王子と結婚でもするんじゃないか？ 国王の計らいでさ。あんたは整った顔立ちをしてる。しかも根性もある。腑抜けた王子の嫁さんにはあんたみたいのが丁度いいだろうさ」

金を紡ぎながら言う小人の台詞に、私は笑った。それはそれで、面白そうだ。この国の王子、つまり跡取りの嫁になれば、ありとあらゆる事が国家権力の名のもとに行う事が出来るのだ。

「とても愉快だわ」

私は満面の笑みを浮かべ、小人を見やる。そして、言った。

「——もし本当にそうになったら、とても、素敵ね」

5

次の日の朝、倉庫を見に来た兵士たちは三度目の奇跡にひとつ、頷きました。本物の、美しい金を紡ぐ女性。国王が貴方をお呼びです。兵士たちはそう告げると、娘に美しいドレスと靴を身に付けさせ、とても立派な馬車に乗せました。向かうは、国王の住まう大きなお城。

娘の姿を見た王様は、娘の美しさに大層驚きました。そして、こん

なにも美しく、しかも金を紡ぐ事の出来る娘など見た事もない。良ければ、息子と結婚をしてくれないかと、娘に言いました。

十

「なんて素敵なお話かしら！ もちろん、お受けするわ」
嬉々として、した振りをしてそう言った。

あの小人の言った通り、私はこの国の王子と結婚した。王子は王位を継承し、私は王妃となった。そして、可愛い双子の娘を産んだ。私に良く似た、綺麗な金色の髪を持つ女の子。

「——お嬢さん、約束はお忘れじゃあないね？」

「私の一番最初の子、だったわね。どうぞ、持って行って」

二人いるから、代わりにあの指輪は返して頂戴ね。にっこりとして、そう続けた。真鍮製の、ちっぽけな指輪。だけど母さまの大事な形見。何を犠牲にしたとしても、手放す事など出来ないもの。

6

可愛い子どもを連れて行かれた娘は大層嘆きました。そして、小人にどうかどうか、それだけはやめてくださいと、後生だからと泣きつきました。娘の涙に心を痛めた小人は言いました。

それじゃあ、おれの名前を当てて見せておくれ。期限は明日から三日間。そうしたら子どもは返してあげよう。

娘は喜び、世界中の名前の本を取り寄せました。城の兵士たちを皆使って名前を調べさせました。

十

「指輪は返って来たけれど……。せめて成人するまでは育ててあげないと。母としての責任は果たさなきゃ」

——ねえ小人。貴方はこの子たちをちゃんと責任を持って育てられるの？ 人様のものに手を出すような、人様を傷付けるような大人になんかなったら私面目が立たないわ。仮にも一国の姫君なのだから、誰に見せても恥ずかしくない子にしないといけないわ。ねえちよっと、聞いているの？ 私の言ってる意味分かる？ 小人、小人！ 目をそらさないでちょうだいよ。だからね、貴方の所にやるのは酷く不安な訳よ分かるでしょ？ だから、せめて外に出しても大丈夫ってくらいしっかりと自分で出来て気が強くて自分の分をしっかりとわきまえつつも何にでも勇ましく向かって行けるような子になるまでは私が育てた方がいいと思うのよだからね

「あー、あー、煩い。分かったよ。そんじゃあこうしよう。三日間時間をやるから、それまでにおれの名前を調べてみるよ。そうしたら、娘は諦めてやる」

「あらほんと？ なんて優しい小人さんなのかしら。ありがとう」
につこりとしてそう言うと、小人は少しげんなりとした表情をした。いくら相手が悪くても、自分の娘だ。可愛くない訳がない。大事に大事に自らの手で育て上げ、綺麗なドレスを着せて、素敵な人の所に嫁いで行くまでは、どうあっても私が育てて行くのだ。他の誰にも渡しはしない。

幾ら私が生きた国庫としか見られてなくても、愛されていなくても、この子たちにそれは関係ない。関係のない人間を巻き込んで問題を起こすような事はあってはならないのだ。どこかの誰かのように自分の子を盛大に巻き込んで行くような事だけは避けなければ。守らなければ。

「それじゃあ、必ず貴方のお名前を当てて見せるわね。楽しみにしていてちょうだい」

「お手柔らかに頼みますよお嬢さん」

言って、小人は窓から飛び降り、くるりと一回転して見事に着地する。いつもながら随分と身軽なのねえ、と私はそれを眺めて呟い

た。

「——さて、と。後はうちの若い子たちに任せておきましょうね」
何の準備もせずに小人と対峙などしない。初めて出会ったときから裏があるのは分かっていたのだ。

幸い、私が嫁ぎ子を成すまでにはかなりの時間があつた。その間、約一年。一年もあれば出来る事はいくらでもあるのだ。だから、何を要求されても良いように、出来る限りの根回しはしておいた。

「まあ、悪役になりきれない悪役志望だもの。あんな小物くらい、なんとでもなるわ」

ここからは高みの見物。

私はくすりと声を漏らして、口角をわずかに上げた。ああ、これからが楽しみだ。

7

世界中の名前の本を取り寄せ調べても、小人の名前は分かりませんでした。城の兵士たちを皆使つて名前を調べさせましたが、名前は分かりませんでした。期限はもう、明日に迫っていました。

娘は大層嘆き、悲しみました。ですが二日目の深夜にひとりの兵士が娘の部屋を訪れ、小人の名前が分かったと、報告にきました。

十

「『——どんな人だつてわかりやしないさ、おれの名前。何せ名乗った事など一度もないのさ、ルンペルシュティルツヒェン。王妃の赤子はおれのもの。おれの名前はルンペルシュティルツヒェン！』」
詰めが甘かったわねルンペルシュティルツヒェンさん、と歌つて見せる。小人は目をまん丸にして、どうして分かったのかと聞いて来た。

「貴方をね、尾行させたの。うちの兵士に。そしたらね、貴方が変

な節を付けて歌っているのを耳にしたんですって」

言えば、小人——ルンペルシュティルツヒエンはちくしょう、と悔しそうに呟いた。そして子ども達の姿をちらと見て、トンガリ耳をぱたりと揺らし、いつもの通りに窓から外に飛び降りた。

「……随分と、呆氣ない」

呟いて、私はにやりと笑う。

指輪は取り返した。子どもたちだって取られずに済んだ。

後は、そう。

この国の世話にならず、この国に利をもたらず事のない所に逃げだし、ついでに父親を殴りに行く。そして、可愛い娘たちと一緒に田舎の小さな家で幸せに暮らすのだ。

「善は急げだわ」

自分に関する書類その他諸々、足取りがばれるかも知れないようなものは全てきちんと燃やしておいたし、身近な使用人や兵士たちにはお金を握らせた。金髪を隠す為の毛染め薬や町民の服だって用意してある。もちろん、小さな子ども用のものまできっちり。それから、以前小人に変えて貰った金の一部も、これからの生活資金にする為に少しばかり頂戴した。足りなくなったら、また糸を紡いで暮しましょう。

「さあて、上手くいけばいいのだけど」

早々に着替え、髪を染める。子どもたちは籠に入れて縄で括り、そうつと窓から外に出した。自分もその縄を使って外にでる。お城での暮らしはとても窮屈だと分かった。所作も言葉も何もかも、常に気が抜けないなんて息がつまってしまう。自由気ままに、私は自分の為に生きるのだ。誰が何と言おうと、私にはやっぱり町人の暮らしが性に合ってる。

「人は自由に生きてこそよ。お城になんかいたら腐ってしまうわ！」
とても清々しい気持ちで、私は子ども達を抱えて駆けだした。

こうして無事に子ども達を取り戻した娘は、優しい王子たちと一緒にとても幸せに暮らしましたとき。

+

お城での生活？ そんなもの、ちょっと豪華な墓場でしかないわ。人間、誰にでも合った環境ってものがあるんだから。そのくらいの事はわきまえないとね！

田舎暮らしは最高に楽しいわ！

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9521t/>

ルンペルシュティルツヒェン

2011年11月16日12時15分発行